

## 2020 年度 入学 試験 問題

# 国 語

(試験時間 13:25~14:25 60分)

1. 解答用紙は、マーク解答用紙のみです。
2. 解答は、必ず解答欄にマークしてください。解答欄以外にマークすると無効となります。
3. 解答は、HBの鉛筆またはシャープペンシルを使用し、訂正する場合は、プラスチック製の消しゴムを使用してください。解答用紙には鉛筆のあとや消しくずを残さないでください。
4. 解答用紙を折り曲げたり、汚したりしないでください。
5. 解答用紙には、必ず受験番号と氏名を記入およびマークしてください。
6. 解答用紙への受験番号の記入およびマークは、コンピュータ処理上非常に重要なので、誤記のないようにしてください。
7. 一度記入したマークを修正する場合、しっかりと消してください。消し残しがあると、マーク読み取り装置が反応して解答が無効となることがあります。



— 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

なぜ、世界のエリートは「美意識」を鍛えるのか？

この、本書で立てた「大きな問い」について、忙しい読者のために、ここでまとめて回答を述べておきたいと思います。この回答以降の本書の内容は、すべてこの短い回答の脚注に過ぎないということになります。

グローバル企業が世界的に著名なアートスクールに幹部候補を送り込む、あるいはニューヨークやロンドンの知的専門職が、早朝のギャラリートークに参加するのは、虚仮威しの教養を身につけるためではありません。彼らは極めて功利的な目的のために「美意識」を鍛えている。なぜなら、これまでのような「分析」「論理」「理性」に軸足をおいた経営、(1) 「サイエンス重視の意思決定」では、今日のように複雑で不安定な世界においてビジネスの舵取りをすることはできない、ということをよくわかっていいるからです。

では、そのように考える具体的な理由はなんなのでしょいか？

今回、本書の執筆にあたっては、多くの企業・人にインタビューをさせていただきましたが、共通して指摘された回答をまとめれば次の三つとなります。

### 1. <sup>(2)</sup> 論理的・理性的な情報処理スキルの限界が <sup>(3)</sup> ロティしつつある

最も多く指摘されたのが「論理的・理性的な情報処理スキルの限界」という問題です。この問題の発生については、大きく二つの要因が絡んでいます。

一つ目は、多くの人が分析的・論理的な情報処理のスキルを身につけた結果、世界中の市場で発生している「正解のコモディティ化」という問題です。

長いこと、分析的で論理的な情報処理のスキルは、ビジネスパーソンにとって必須のものだとされてきました。

(4)

正しく論理的・理性的に情報処理をするということは、「他人と同じ正解を出す」ということでもあるわけですから、必然的に「差別化の消失」という問題を招くこととなります。本書の主たるテーマは「経営におけるアートとサイエンスのバランス」ですが、経営の意思決定が過度に「サイエンス」に振れると、必ずこの問題が発生することになります。

二つ目は、分析的・論理的な情報処理スキルの「方法論としての限界」です。

昨今のグローバルカンファレンスではよく「VUCA」という言葉が聞かれます。もともとは米国陸軍が現在の世界情勢を表現するために用いた造語ですが、今日では様々な場所で聞かれるようになりました。「VUCA」とは「Volatility」＝不安定」「Uncertainty」＝不確実」「Complexity」＝複雑」「Ambiguity」＝曖昧」という、今日の世界の状況を表す四つの単語の頭文字を組み合わせたものです。

このような世界において、(5) 論理的で理性的であろうとすれば、それは経営における問題解決能力や創造力の麻痺をもたらすこととなります。

これまで有効とされてきた論理思考のスキルは、問題の発生とその要因を単純化された静的な因果関係のモデルとして抽象化し、その解決方法を考えるというアプローチをとります。しかし、問題を構成する因子が増加し、かつその関係が動的に複雑に変化するようになると、この問題解決アプローチは機能しません。

このような世界において、あくまで論理的・理性的であろうとすれば、いつまでも合理性は担保されず、意思決定は膠着することになります。

経営の意思決定における合理性の重要性を最初に指摘したのは経営学者のイゴール・アンゾフですが、彼は同時に過度な分析志向・論理志向の危険性もまた指摘しています。アンゾフは、1965年に著した『企業戦略論』において、合理性を過剰に求めることで企業の意思決定が停滞状態に陥る可能性を指摘し、その状態を「分析麻痺」という絶妙な言葉で表現しました。

(6)、私が見るかぎり、この状況は多くの日本企業において発生している問題でもあります。

このように様々な要素が複雑に絡み合うような世界においては、要素カ<sup>7)</sup>ンゲン主義の論理思考アプローチは機能しません。ここでは全体を直覚的に捉える感性と、「真・善・美」が感じられる打ち手を(8)に創出する構想力や創造力が、求められることとなります。

## 2. 世界中の市場が「自己実現的消費」へと向かいつつある

ノーベル経済学賞を受賞したロバート・ウィリアム・フォードは「世界中に広まった豊かさは、全人口のほんの一握りの人たちのものであった『自己実現の追求』を、ほとんどの全ての人に広げることを可能にした」と指摘しています。

人類史においてはじめてと言つていい「全地球規模での経済成長」が進展しつつあるいま、世界は巨大な「自己実現欲求の市場」になりつつあります。このような市場で戦うためには、精密なマーケティングスキルを用いて論理的に(9)優位性や価格競争力を形成する能力よりも、人の承認欲求や自己実現欲求を刺激するような感性や美意識が重要になります。

人間の欲求を、最も低位の「生存の欲求」から、最も上位の「自己実現欲求」の5段階に分類できるという考え方、いわゆる「欲求5段階説」を提唱したのはエイブラム・マズローでした。この枠組みで考えれば、経済成長に<sup>10)</sup>トモナう生活水準の上昇によって、商品やサービスに求められる便益は、「安全で快適な暮らしをしたい」安全欲求を満たすものから、徐々に「集団に属したい」帰属欲求へ、さらに「他者から認められたい」承認欲求へと進むことになり、最終的には「自分らしい生き方を実現したい」自己実現欲求へと進展することになります。

先進国における消費行動が「自己表現のための記号の発信」に他ならないことを明確に指摘したのはフランスの思想家であるジャン・ボードリヤールでしたが、この指摘は(11)先進国においてだけでなく、多くの発展途上国にも当てはまるようになってきています。ひっくり返して言えば、<sup>12)</sup>全ての消費ビジネスがファッション化しつつあるということです。このような世界においては、企業やリーダーの「美意識」の水準が、企業の競争力を大きく左右することになります。

### 3. システムの変化にルールの制定が追いつかない状況が発生している

現在、社会における様々な領域で「法律の整備が追いつかない」という問題が発生しています。システムの変化に対してルールが(13)に制定されるような社会において、明文化された法律だけを拠り所にして判断を行うという考え方、いわゆる実定法主義は、結果として大きく倫理を<sup>(14)</sup>フみ外すことになる恐れがあり、非常に危険です。この危険性をわかりやすい形で示していたのが旧ライブドアや一連のDeNAの<sup>(15)</sup>フシヨウジでした。

現在のように変化の早い世界においては、ルールの整備はシステムの変化に引きずられる形で、後追いでなされることとなります。そのような世界において、クオリテイの高い意思決定を継続的にするためには、明文化されたルールや法律だけを拠り所にするのではなく、内在的に「真・善・美」を判断するための「美意識」が求められることとなります。

グーグルは英国の人工知能ベンチャーディープマインドを買収した際、社内に人工知能の暴走を食い止めるための倫理委員会を設置したと言われています。人工知能のように進化・変化の激しい領域においては、その活用を律するディシプリンを外部に求めることは大きく倫理に<sup>(16)</sup>悖るリスクがあると考え、その判断を内部化する決定を下したわけです。先述した旧ライブドアやDeNAと比較すれば、企業哲学のレベルとして「格が違う」と言わざるを得ません。

システムの変化に法律の整備が追いつかないという現在のような状況においては、明文化された法律だけを拠り所にせず、自分なりの「真・善・美」の感覚、つまり「美意識」に照らして判断する態度が必要になります。

(山口周『世界のエリートはなぜ「美意識」を鍛えるのか?』による)

\* 問題の作成上の都合により、本文の一部に手を加えてある。

〔問二〕 傍線(3)(7)(10)(14)(15)の漢字と同じ漢字を含むものを、左の各群の中から一つずつ選び、符号で答えなさい。

(3) ロテイ

- A 土地をテイトウに入れる
- B 住宅をサテイする
- C 自著を恩師にケンテイする
- D 景気がテイメイする
- E 教科書をカイテイする

(7) カンゲン

- A 父親のカンレキを祝う
- B カンカすべからざる問題
- C ゴカン性のある部品
- D 注意をカンキする
- E 悪にカンゼンと立ち向かう

(10) トモナウ

- A 選挙戦のジョバン
- B バンユウをふるう
- C 9回にトウバンする
- D タイコバンを押す
- E おショウバンにあずかる

(14) フみ外す

- A 一國をトウチする
- B 現行方式をトウシユウする
- C 名簿にトウサイする
- D 改札口にサツトウする
- E 現実からトウヒする

(15) フシヨウジ

- A 内外の文献をシヨウリヨウする
- B 不注意が事故をシヨウライする
- C 万歳をシヨウワする
- D オリンピックのハッシヨウの地
- E 学歴をサシヨウする

〔問二〕 空欄(1)(4)(5)(6)(11)に入れるのにもっとも適當なものを左の中から選び、符号で答えなさい。ただし、同じ符号を二度用い

てはいけない。

- A しかし
- B もはや
- C いわば
- D そして
- E いたずらに



〔問三〕 傍線(2)「論理的・理性的な情報処理スキルの限界」とあるが、これはどういうことか。その説明としてもっとも適当なものの中から選び、符号で答えなさい。

A 論理的・理性的であろうとすれば、身につけた美意識を働かすことができなくなってしまっただけでなく、変化の著しい社会においては、分析的な情報処理を行うことができなくなってしまっただけということ。

B 論理的・理性的であろうとすれば、不安定で不確実で複雑で曖昧な状況を変化させることが難しくなってしまっただけでなく、全体を直覚的に捉える感性と構想力や想像力も機能しなくなってしまうということ。

C 論理的・理性的であろうとすれば、他者との差異が生まれず独創性を持ってなくなってしまうとともに、様々な要素が複雑に絡み合う世界では、意思決定を円滑に行うこともできなくなってしまうということ。

D 論理的・理性的であろうとすれば、アートとサイエンスのバランスを欠くことになってしまっただけでなく、過度に安定性や明確性を求めることによつて、想像力が麻痺することになってしまうということ。

E 論理的・理性的であろうとすれば、他者と同じような意思決定をすることになってしまっただけでなく、かえって経営の意思決定における合理性の重要さをないがしろにすることになってしまっただけということ。

〔問四〕 空欄(8)(9)(13)に入れるのもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。ただし、同じ符号を二度用いてはいけない。

- A 即興的                      B 事後的                      C 一般的                      D 内省的                      E 機能的

〔問五〕 傍線(12)「全ての消費ビジネスがファッション化しつつある」とあるが、これはどういうことか。その説明としてもつても適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 欲求5段階説が社会に浸透した結果、消費ビジネスが快適な暮らしをサポートするだけでなく、他者から認められる商品みだを売ることに価値を見出しつつあるということ。
- B 企業やリーダーの美意識の水準が上がったことで、消費ビジネスも自らの安全欲求から帰属意識へ、さらには承認欲求、自己実現欲求を満たす方向へと変化しつつあるということ。
- C 資本主義が全世界に浸透したことによって、消費ビジネスが先進国だけではなく全地球規模で商品みだを売ろうと、価格を抑えて消費者の購買欲求を刺激しつつあるということ。
- D 消費者の感性や美意識が高まってきたために、消費ビジネスが扱う商品もよりセンスの良いものみだに変わり、さらに消費者の欲求を開拓するようになりつつあるということ。
- E 全地球規模で経済成長が進展し、消費ビジネスが人間らしい生活を満たす商品みだを売るだけでなく、自分らしさを表現できる商品みだを売るように変化しつつあるということ。

〔問六〕 本文の趣旨と合致するものとして、もつとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 合理性を追求することは企業にとって不利益を被ることが多くなってきたため、社員がこぞってアートスクールに通い、自らの感性を鍛えることが求められている。
- B 法律を抛り所にして意思決定を行う実定法主義に基づいては他者との差別化ができなくなるので、自らの合理的な価値基準で意思決定を行わなければならない。
- C 論理的な情報処理能力に長けた人ではなく、芸術に関する知識を豊富に持った人を企業が重視しようとするのは、グローバル社会を生き抜くために必要だからである。
- D 見せかけだけの教養を身につけるためではなく、実質的な利益を得るために、グローバル企業のエリートは自分なりの「真・善・美」の感覚を磨こうとしている。
- E 複雑で不安定な社会でビジネスの舵取りを行うことがだんだん困難になってきているため、しっかりとした企業哲学に基づき、いかに人材を育てていくかが問われている。

二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

「失われた二〇年」と言われる日本経済の長期にわたる低成長の原因をめぐっては、様々な見方が対立してきた。政府の財政政策のあり方がまずかったのではないか。日本銀行の金融政策に問題があったのではないか。うまく規制改革が進まなかったことが原因ではないか。いや、人口要因が重要なのではないか。

金融政策に原因があると考え、金融政策の大きな転換を図ったのが、アベノミクスでありクロダノミクスだった。大胆な量的緩和を行って、インフレを引き起こそうとした。しかし、二〇一六年末の時点でも経済成長率もインフレ率も高まっていなかった。

人口減少だから経済成長が期待できないというのは、経済学的には間違いだ。このことを説得的に示した吉川洋の『人口と日本経済』（中公新書）が二〇一六年に出版され反響を呼んだ。私たちの生活の豊かさは一人当たりの所得で決まる。一人当たりの所得で考えれば、伝統的な経済学では、人口が減る方が豊かになることになっている。資本装備率を見ても、人口が減っても機械や設備は同じスピードで減らないので、一人当たりの機械や設備は豊かになり、その状況下で生産性がより高くなる。人口が減れば一人一人が豊かになるというのは、経済学の基本的な命題だ。そして、一人当たりの所得を高めてきた最大の要因は、技術革新をはじめとするイノベーションなのだ。つまり、人口が減っても、イノベーションによって私たちの一人当たり所得が人口減少のスピードを上回って増加すれば、GDPも減少しない。

ただ、原理としてはそうだが、いくつかの問題がある。現代のように、技術革新のスピードが速くなると、豊かであるはずの資本も陳腐化し、急速に価値が下がってしまう。実際、バブルの頃に投資したもののなかには、すでに価値がなくなったものもたくさんある。日本の企業で、液晶事業に多くの投資をしたけれども、すでに撤退を余儀なくされた例もある。住宅にもたくさん投資がなされたが、これから人口減少で空き家問題が深刻になっていくので、過剰投資だったといえる。

イノベーションが生じれば十分豊かになれるというのは真実だ。しかし、イノベーションを生むためには、社会の変化が必要だ。イノベーションを思いつく人が確率的に、たとえば一〇〇〇人に一人だとしたら、人口が減れば思いつく人も減る。それを

防ぐには、人的資本に今まで以上に投資して、イノベーションを起こす人を増やすか、世界中からイノベーションな人を集めてくるか、イノベーションが生じやすい社会にする必要がある。

ところが、そのためには教育投資をしなければならぬ。投資をして、イノベーションな人を応援するような教育をしなければならぬし、それにもなつて社会の価値観を変えていかなければならぬ。しかし、若い人たちが教育することよりも自分たちの年金額を優先したり、これまでの価値観の維持の方が大事だというのであれば、「もう経済成長できない」、ひいては「もう経済成長なんて必要ない」という

(3)

が蔓延<sup>まんえん</sup>せざるを得ない。

スタンフォード大学ビジネススクール教授のラジャーは、起業家が最も多くなるのは三〇代だという論文を書いている。若い人の方がイノベーションだけだと、若すぎるとビジネスのノウハウを知らないから事業にならない。だから三〇代が起業に最適だと。そうだとすれば、三〇代の割合が小さくなれば、起業も減ってしまう。高齢者が管理職ポストを埋めてしまつて若手が管理職経験をもてなくなるのも理由だ。

最大の問題は教育だ。学問も、技術開発も、スポーツの世界も同じだ。二〇一六年のリオデジャネイロ・オリンピックで、日本は最多メダル数を更新したが、イギリスやドイツなど、日本よりも人口が少ない国で、日本よりも多くのメダルを獲得しているケースはある。結局、どれだけスポーツに投資しているか、どういう訓練をスポーツ選手にしているかということが大事だ。たとえば日本の柔道は、ロンドン・オリンピックの反省から、近代的な練習をするようになって、リオでは全階級でメダルを獲得することができた。

イノベーションも同じだ。イノベーションな教育に変えていくことができなければ、悲観論にならざるを得ない。教育に投資して、イノベーションが生まれれば、私たちはもっと豊かになれる。教育投資によつて私たちは将来豊かになれるということが、私たちの共通認識になれば、そのための税を負担することへの抵抗もなくなるのではないか。

若者への投資だけでなく、高齢者が今より活躍できる仕組み作りも大事だ。たとえば日本社会を枠にはめている制度の一つが

定年制だ。定年制は日本の組織の活力を維持するうまい仕組みだった。定年まで雇用を保障して安心して働いてもらう一方で、考え方がマンネリ化して生産性が低くなった高年齢労働者を自動的に組織から退出させ、

業員数が増加している場合には、定年制があっても若い従業員が相対的に多くなるため、年功賃金は人件費を安く抑える仕組みになった。そのうえ、若い人たちのイノベータータイプな考え方も取り入れやすかった。しかし、人員の構成が高齢化してからは、メリットがデメリットに変わってきている。定年間近で、変化や新たな教育訓練を嫌う労働者が相対的に増えてしまうからだ。

ここで参考になるのが、アメリカの経験だ。アメリカでは一九六七年に年齢差別禁止法が成立してから、大学教授の定年がなくなった。年齢による強制退職がなくなり、解雇自由の下、実力のある、よい成果を挙げている教授はいつまでも大学に残ることができるとも、もちろん業績を上げられない教員の待遇は下げられる。アメリカで定年がなくなった結果、トップジャーナルに占める五〇歳以上の教員の比率が上がったことを実証した論文が発表されている。

アメリカの教授の定年は以前は七〇歳だった。日本は六五歳のところが多い。私は今、五六歳だが、これから頑張ったところで六五歳までの九年しか研究を続けられないとしたら、そろそろゆっくりしていこうかという気分にならないわけではない。しかし、頑張れば七〇歳、あるいは八〇歳ぐらいまで雇用が確保され、研究を続けることができ、所得も高いものを得られるというのであれば、新しい研究プロジェクトにチャレンジしてみようかというインセンティブが生まれる。期間が短ければ、頑張ってもそれを刈り取れる期間が短くなり、その結果、新たなものにチャレンジしなくなるという面が大きいのであって、年をとったから一律にイノベータータイプではなくなるというわけではない。給与格差も引退年齢格差も小さい定年制度から、サボれば解雇されるが、頑張ればよりよい処遇が続くという制度に変われば、イノベーションへの努力が今より増えるのではないか。

これは大学という職場に限らず、一般企業でも同じことが言えるだろう。年をとっても頑張らなければならない効率的なシステムを作るのは、長く働いてきたからそろそろのんびりしたいと思っている人にとってはつらい話だ。しかし、そのシステムがなければ、社会は活性化しない。

(大竹文雄『競争社会の歩き方』による)

\* 問題の作成上の都合により、本文の一部に手を加えてある。

〔問一〕 傍線(1)「日本経済の長期にわたる低成長」とあるが、その原因は何だと筆者は考えているのか。その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 大胆な量的緩和が一時は功を奏して、経済成長率やインフレ率も上昇するにはしたが、長続きすることができなかったこと。

B 実体経済を分析することなく、経済成長が期待できないのは人口の減少に原因があるという神話が社会に浸透していたこと。

C 生活の豊かさは一人当たりの所得で決まるのに、政府や企業は技術革新に資本を投下し、個人の生活を重視しなかったこと。

D 人口減少が原因ではないだろうが、適切にイノベーションを行い、一人当たりの所得を高めることができていなかったこと。

E 金融政策の転換を政府や日本銀行が図ったのだが、企業が伝統的な経済学を信奉していたため、うまく機能しなかったこと。

〔問二〕 傍線(2)「イノベーションを生む」とあるが、そのためにはどうしなければならぬのか。この説明としてもっとも適当

なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 日本の社会だけでは限界があり、イノベータータイプな人材を世界から集めるしか方法はないという認識をもたなければならぬ。

B 義務教育だけではなく大学などの高等教育においても授業料の無償化を進め、誰もが学びやすい社会にしなければならぬ。

C 高齢者が監理職ポストを占めていては若者の士気が上がらないので、定年制を見直し、定年年齢を引き下げなければならぬ。

D 伝統的な経済理論に従ってはいノベーションを行えないので、新しい経済理論を学ぶため再教育を受けなければならぬ。

E 若いビジネスマンの教育に投資し、イノベータータイプな考え方を育て、社会全体がイノベータータイプに変化しなければならぬ。

〔問三〕 空欄(3)に入れるのもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A リアリズム      B アナクロニズム      C ペシミズム      D マンネリズム      E エゴイズム



〔問四〕 空欄(4)に入れるのにもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 組織の新陳代謝を図るといふ機能をもっていた
- B 財政の健全化をもたらすといふ使命をもっていた
- C 企業のV字回復を目指すといふ目的をもっていた
- D 社員の技術を向上させるといふ任務をもっていた
- E 社会の活性化を画策するといふ企図をもっていた

〔問五〕 傍線(5)「そのシステム」とあるが、それはどのようなシステムなのか。その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A サボれば解雇されることは当然のことであるが、サボらず真面目に働いているならば雇用を継続していくというシステム。
- B イノベーションへの努力に年齢は関係ないのだから、能力をもっている高齢者の意欲を刺激するようなシステム。
- C 企業のために自らのもっている能力を発揮しようとする忠誠心のある人を、年齢に関係なく優先的に雇うというシステム。
- D 高齢者も若いものと変わらず常にイノベーションへの努力を怠らないように、効率的に人事管理ができるようなシステム。
- E 年金をもらっており、しかも優秀な人たちを年齢に関係なく雇い入れ、安い給与で効果を上げてもらえるようなシステム。

〔問六〕 本文の趣旨と合致するものとして、もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 資本を投下して技術革新を行ってれば、一人当たりの所得は上がっていき、これに対しては何の問題も生じてはいない。

B イノベーションを生み出すためには社会全体が一つにまとまる必要があり、オリンピックもそのための一つの方法である。

C 定年制は日本の組織の活力をそぎ落とすものであり何の利点もないのだから、早急に廃止しなければならないものである。

D GDPを減少させないためには、イノベーションを欠かすことができないので、そのための対策を講じなければならぬ。

E 企業が長期的に安定して利潤を上げていくためには、高齢者と若者がそれぞれのもっている良い点を發揮する必要がある。

### 三 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

「伝え合い」の一部を支える「ことば」表現には、一定の形式をもち、一つのまとまった意味を備えているものがある。その一例が、会話の中に出てくる「ことわざ」である。ことわざには、(1) は理解できるように思えるが、(2) を知れば、明らかに異文化を感じるといった例が多く見られる。そして、それは受けとる側の文化背景によって、時には大きな誤解の原因となることもある。

たとえば、東アフリカ各地にはことわざが豊富にある。「友は腹なり」ということわざは、わたしが東アフリカに滞在していた時に何度も耳にしたものの一つである。初めて言われた時には、「友達というのは腹を割って、互いに裏表なく率直に自分の思うことを表現しあえる仲であるべきだ」とでもいう意味かと誤解した。しかし、その本当の意味は、「腹が空いている者が何かを食わせないような人間は、友であるとは言えない」という意味だと分かったのである。日本ならば、生活に余裕がある人に向かつて、「少々でもいいのです。お金を下さいますか」と平然と言う人は、(3) だと見なされかねない。しかし、彼の地では、非難されるのはむしろ、その願いを断った人の方だということを見せられる機会が幾度もあった。

「言葉は風のようなもの」ということわざについては、「良いことばは、風のようにサッと通り過ぎる、さわやかなもの」ということだと、わたしは長い間、美しいイメージを抱いていた。しかし、真意はそうではなかった。「言葉などというものは、風のごとく過ぎ去ってしまう無責任なものである。だから、本気になって他人のことなど頼りにしたりすべきものではない」というのが、本当だったのである。

その他にも、東アフリカ一帯で知られていることわざに、「山と山とは出会わない。出会うのは人間だけ」というものがある。このことわざにも、わたしは良いイメージをもっていた。「長く出会うことができなかつた者にも、いつの日か出会える時がある」。我知らず、そんな風な意味だと勘違いしていたのである。ところが、最近、政治紛争についてマスコミでよく話題にあがるリビアのことを知人と話しているときに、このことわざと同じものがリビアにもあるのを知った。しかし、その意味は予想外

のものであった。なんと、「山と山とは出会うことがないから安心できるが、悪い人間とは出会ってしまうこともあるから気をつける」という意味だというのである。まさに、「ことばを通じて意味通ぜず」を実感したことわざであった。

かつて日本に「新人類」と呼ばれる若者が出現したとき、そこでは、「ことば」の用法に欠かせない人間関係の表現のあり方に、若い人びとと年配者との間にズレが出ていることが誤解の原因となっていた。その頃の若者たちは、よそよそしくて堅苦しい敬語で上司に接するよりは、上司にも親しみを込めた仲間ことばで「伝え合い」を行った方が、一緒に仕事をする仲としては望ましいと考えていたのであって、決して上司に無礼な行いをするつもりではなかったのだろう。しかし、年配の人びとから見れば、社会人としてまともな「ことば遣い」とは思えない、つまり社会人としての規範となる言語コードから外れた彼らの会話の仕方は、受けつけ難いどころか、追いつくこともできなかったのである。

「ことばを通じて、意味通ぜず」といった事態は、国際的な場面での「伝え合い」を見れば分かりやすい。多くの国の代表が、英語という共通語で演説をしているが、その議題である「平和」、「自由」、「国民の権利」などという語がもつ基本的な意味は、国の情勢によって大きく異なっている。実際には、その場の議論は「ことばを通じて意味通ぜず」の状況であり、<sup>(4)</sup>空回りしているのと同じである。

「伝え合い」を支える「文化コード」の内容面で重要とされるのは、人びとの間に見られる単なる平均的な意味ではなくて、社会で「そうあるべき」、「そうであってほしい」とされる「規範」である。規範なき社会は存在しない。【Ⅰ】そして、「伝え合い」にも規範的な表現というものがある。【Ⅱ】それに近い表現を日常的にする人間がいたならば、その人物は仲間から大変な変人だと見なされるだけだろう。【Ⅲ】規範は、個々の生活圏の中で、社会の要求、期待を言語化し、それを行動の基本的な支えとしたものである。【Ⅳ】現実の「伝え合い」に見られる表現は、個々の人や場合によって実に多様であるが、それを背後から支えているのが規範なのである。【Ⅴ】

また、「正しさ」を判断する根拠として、社会の側からみた「規範」にそぐう、そぐわないといったことは別に、個人の側

から見た知識による「理解」と心の面での「納得」がある。日常の「伝え合い」において、「正しさ」の判断は知識にもとづく論理的な「理解」よりは、むしろ本人の「納得」に支えられている場合が多い。この「理解」と「納得」という異なるものが、区別されることなく使用されていることにも注意が必要である。

ところで最近気になるのが、「安全」と「安心」という単語である。「安全」はいわば「理解」であり、「安心」は「納得」である。つまり、「食べ物」が「安全である」と言うことは、科学的に人体に害を及ぼさないということと言っているが、その理由を知識として得たからと言って、すべての人が理解するとはかぎらない。なぜならば、その理由の意味は、薬学のような学問に裏づけられているものなので、その分野を学習して身につける力がある人でなければ分からないからだ。だが、そうした形で十分に理解できない人も、世間には少なからずいる。他方、ある種の「食べ物」が「安心」であるということになると、能力の差なしに誰もが納得することが可能である。「安心」は、人びとの気持ちを根拠としているからである。

理想的には「安心」と「安全」との距離がもつとも近くなるのが望ましいが、一般の「伝え合い」では、もつばら「安心」が先行している。名が通った会社や有名店の名前が付いていけば、人は何も考えずに「安心」して食べ物を口にする。しかし、会社の名を聞いたこともなく、包装も安っぽい食べ物だと、<sup>(5)</sup>怖くて口にする勇気が出ないというのは、世間では普通のことなのである。

(西江雅之『ことばだけでは伝わらない』による)

\* 問題の作成上の都合により、本文の一部に手を加えてある。

〔問一〕 空欄(1)(2)に入れるのもつとも適当な組み合わせを左の中から選び、符号で答えなさい。

- |   |            |             |
|---|------------|-------------|
| A | (1) 辞書的な意味 | (2) 文字通りの意味 |
| B | (1) 文脈的な意味 | (2) 本当の意味   |
| C | (1) 表面的な意味 | (2) 本当の意味   |
| D | (1) 文脈的な意味 | (2) 通常の意味   |
| E | (1) 表面的な意味 | (2) 文字通りの意味 |

〔問二〕 空欄(3)に入れるのもつとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 懐がさびしい人間
- B 欲に目がくらんだ人間
- C 夜郎自大になっている人間
- D 身の程を知らない人間
- E 恥も外聞もない人間

〔問三〕 傍線(4)「空回りしている」とあるが、「空回り」はなぜ起こるのか。その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 英語を母語としない人たちが英語で議論を行ったとしても、自分たちの要求を正しく言語化することには限界があるから。

B 平均的な意味で用いられたことばによって議論を行ったとしても、議論に進展がなく不毛な時間が過ぎるだけであるから。

C 議論している者の文化的背景が異なっていると、同じことばを用いても、そこに込められた意味合いが異なってしまうから。

D ことばは言語コードに従って用いられて初めて正しい意味が伝わるが、その言語コードが守られずに議論が行われるから。

E 英語がもっている規範的な意味を正確に理解せずに議論していると、同じことばも異なった意味で捉えられてしまうから。

〔問四〕 つぎの一文を入れる箇所としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

しかし、規範そのままの表現を、ある人物が現実の場で日常的に続けたとしたならば、それは奇跡的な出来事であるとも言えるだろう。

A 〔I〕      B 〔II〕      C 〔III〕      D 〔IV〕      E 〔V〕

〔問五〕 傍線(5)「怖くて口にする勇気が出ない」とあるが、それはなぜか。その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 「安心」とは心理的なものであるため、その食べ物が「安全」だと心の底から確証をもてないと食べることができないから。

B 論理的に「安全」であると理解することも、納得して「安心」することも難しく、食べることには困難がつきまとうから。

C 心理的な側面を持つ「安心」と論理的な側面を持つ「安全」とが両方ともそろって初めて食べることができるから。

D 「安全」は会社名や包装などから総合的に判断を下すものであり、「安全」だとわかって初めて食べることができるから。

E 本当に「安全」であると理解できることよりも、「安心」できているかどうかのほうが、食べることは重要であるから。



〔問六〕 本文の趣旨と合致するものとして、もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 若者たちと年配の人びとの間には深い溝があり、簡単にはコミュニケーションをとることができないと心しなければならぬ。

B 「ことばを通じて意味通ぜず」ということがあるということを経験に銘じて、安易にわかったと思うことは慎まなければならない。

C 国際的な場面では英語が用いられることが多いが、英語が万能の言語ではないことをしっかりと認識しておかないといけない。

D 同じ規範を背景に持っていて初めてことばは使用することができるため、ことばを用いた意思の疎通には文化が重要となる。

E ことばを論理的に用いることは日常の場面では難しいので、正しいかどうかよりも納得できるかどうかを基準にすればよい。

